

『ボランティアのこれまでとこれから』

この地域のボランティアの歩みをたどり、ボランティアの原点とこれからについて考えを深める『なごやのボランティア史』の制作が進んでいます。それに携わる編集委員の3人が、ボランティアにまつわるあれこれをざっくばらんに語り合いました。

ボランティアを続ける理由、続けられる仕組み

織田 最初に『ボランティア史』に取り組むことになったいきさつに触れますが、名古屋市に地域福祉活動の草分けとして、配食や傾聴ボランティアなどに取り組んできた野村文枝さんという方がいらっしゃいます。「自分が気づいた社会問題を解決するための社会的な仕組みにつなげていくことが、ボランティアの役割」とおっしゃって、半世紀も活動を続けています。その野村さんから「活動してきた50年分の資料を保管している。名古屋のボランティアの歴史として取りまとめてほしい」というお話をいただきました。初めは躊躇したんですが、ボラみみとしても意義深いことなので、ぜひ取り組もうという話になりました。そこで学識経験者や実践者からなる編集委員会をつくり、2年後の完成に向けて動き出しました。

今回は編集委員のお二人と、自身の経験や実践を交えながら、最近感じていることなど意見交換したいと思います。お二人ともボランティア歴は長いですね。

渡辺 僕は1980年から「夢喰人」という障害者の余暇支援ボランティアグループをやっています。障害を持った仲間と出かけていくと、いろんな出来事が起こります。当時は街に出るのは大変なことで、地下鉄の階段と一緒によいしょよいしょと上って、ホームでは駅員さんとともに、でも次に会った時には「こっちからどうぞ」と案内されて、「ありがどうね。でも、本当は普通に改札を通れるといいんだよね」と。そんなことを繰り返してきた。これが当たり前だよということを見えるような形にしたいと思いながら、ずっと

活動してきました。そのほかにも「チャイルドラインあいち」という子どもの電話相談のNPOにも関わっています。

陸川 私は、中学、高校時代にサマーボランティアスクールに参加したのが始まりです。施設で高齢者の方と触れ合う機会があって、おじいちゃんと将棋を指したんですが、へたっぴだったのにすごく喜んでもらえた。その笑顔がうれしくて、ボランティアって人に喜んでもらえるんだ、なんてすてきなんでしょうと思いました。大学を選ぶ時に、おじいちゃんの顔が思い浮かんで、福祉を学び、仕事につなげるのもおもしろいかなと思い、福祉系の大学に進みました。在学中は障害のある子どもたちと遊ぶボランティアサークルで活動したり、地元の手話サークルにも入りました。手話サークルは、大学1年生から通い始め、今も続けています。

織田 ずっと続けている理由は？

陸川 私にとって手話サークルは、唯一の地元との接点なんです。地域の他のボランティアグループとも知り合えるし、メンバーは近隣の人なので、地元情報が入ってくる。「あそこにスーパーができたね」なんて地域住民同士の会話がするのも楽しい。でも、好きで無理なくやっていることが一番かな。

渡辺 どんな人も当たり前前に尊重されて生きていける社会になってほしい、その思いがずっとずっと根底にあります。自分に何ができるだろう、どうしたら誰もが生きやすい社会になるのか。ずっと思い、探り続けている。それが自分の根っこなので、それが変わらないからやめない、やめる理由がないということなのかなと思います。

織田 僕は30歳のときにボランティアを探し始めたら、どこにも情報がなくて、1年かけて見つけたのが、障害者と遊ぶサークル。初めて重度の知的障害の子がいる施設に行って、すごいショックを受け、茫然と立ちすくんでしまった。この子たちのことを理解できるまで続けようと思った。施設に入れることは地域社会からの隔離政策で、きちんと教育を受けたらもっと成長できると思った。何とかしたいという思いがあって、どんどのめり込んでいった。乳児院に行っても、高齢者施設に行ってもそうですけど、いろんなものに対しての怒りのようなものを感じてきました。

人に対する怒りではなく、社会を変えないといけないという思い、それが僕の原動力になっています。

では、お二人が関わっている団体についておうかがいしますが、ボランティアに長く続けてもらうために工夫されていることはありますか。

陸川 手話サークルでは、「こんなイベントがありますよ」と最近来ていない人にも情報を送り続けています。「案内をもらったので久しぶりに来ました」と参加してくれることもある。気にかけながら声をかけながら、「久しぶりでも大丈夫だよ」と、戻って来られる場所をつくるように心がけています。

渡辺 学生の頃に来てくれた子が、結婚して子どもを産んで大変な時期があっても、ずっと案内を送っていると「子連れで行ってもいいかな？」と来てくれることがあるので、それはすごくうれしいですね。チャイルドラインあいちでは、電話を受ける個人的な活動なので、続ける仕組みは一生懸命考えています。グループ研修を2カ月に1回やりまし、新人ボランティアにはお兄さん、お姉さん役を1年間つけます。参加できなくて申し訳ないと思うのはごく普通に起こる気持ちなので、誰かが見守っているよと声をかけることは意識的に取り組んでいます。

誰のための、何のための活動か。ふりかえりを大切に

織田 僕が始めた頃と今とではボランティアの違いをひしひし感じているのですが、どうですか。

渡辺 自分が始めた頃は、語りたがる人とか、ちょっとあやしい人とかいたけど、そういう人は減った。けっこうみんないい人(笑)。

織田 濃い人、きつい人、個性的な人が多かった(笑)。今は一般的な人が普通にボランティアをやっている。野村文枝さんが、「気がついた社会問題を解決の仕組み、制度につないでいく」と言って、それを実践してきた。そういう人がけっこういたんですが、今は少し薄くなってきたように感じています。

陸川 今年で社協職員14年目ですが、ボランティアの相談に来られる方と相談内容は変わってきたと感じています。以前は、「自分の親が病院でお世話になったので、病院でボランティアをしたい」とか、「障害のある家族がいるので…」とか、具体的な希望などを持っている人が多かった。最近は「『ボランティア』をやりたい」という人が増えた気がします。30代ぐらいの働き盛りの人、学生の頃にボランティアをやっていて仕事が忙しくてやめたけどまたやりたいという人、定年退職を前に会社からセカンドライフプランを考えなさいと言われて来たという人も。



ボランティアという言葉が身近になってきている分、中身はわからないけど何か人の役に立つこと、ライフスタイル、ファッション的なものにとらえている人も増えているかなと。相談では「子どもは好きですか」、「事務系のことは得意ですか」などとお聞きしながら、その方に合ったボランティアを一緒に探しています。ボランティアをやってみたくない、興味があるなど感じている人は増えていますね。

織田 大学でボランティア講座の講師をした時に、「ボランティアをしている人は？」と聞くと、衣類の仕分けのボランティアをやっている学生が何人かいたんですが、どの国でどう使われているかも知らなかった。それは問題だと思いました。

陸川 社協に年に数回ぐらいかかってくる電話があります。「わりばしの袋を集めました。車いすに換えてもらえると聞いたけど、どうしたらいいですか」と。いつからか都市伝説のように広まっている話みたいで、「紙資源にはなりますよ」とお答えするんですが…。誰のために何のためにやる活動なのかを理解しておかないと、自分もショックだし、残念ですね。そういう層が増えるのは心配です。

渡辺 イベントをつくる人たちが簡単にボランティアを募集している。これはバイトの仕事だろというのをボランティアにやらせているのはよく目にしますね。イベントの交通整理をボランティアにさせて、主催者側が「ボランティアでやっているの、苦情は受け付けません」と。なんだそれは!というのはありますね。

陸川 東京オリンピック・パラリンピックでも何万人とボランティアを募集しますが、イベントボランティアは増えてきますね。ひとつのきっかけとしてはいいですね。愛知万博でのボランティア活動を終えた方から、他のボランティアをしたいと相談を受けたこともありました。

渡辺 イベントの駐車場係のボランティアをやっても、挨拶だけして帰ったらさみしい。隣の人と話すのが大事だし、最後にみんなで、今日はどうだったとか、体験や感じたことを話し合う。それによって気づきが生まれる。イベントとして何を大事にしていたのか話せるような仕組みをつくっていないと、単に使われる人で終わってしまう。

